

文化と幸福感：社会的適応からのアプローチ

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

■研究目的

日本文化は関係志向的、もしくは相互協調的であり、人々が「関係性」を重視していることが示されてきている。しかしその一方で、近年の日本においては、「ひきこもり」など、不適応感や対人関係の難しさとコミュニケーションの不全が取り上げられることも多くなってきている。

本研究では若者の幸福感と不幸せ感を検討し、心の健康と文化・社会的適応に関連する諸分野への貢献を目指す。さらに、日本文化の中で中心に見られる現象だけではなく、一般的傾向とは異なる行動様式や価値基準を持つ若者たち（特にニート・ひきこもり・フリーター傾向の強い若者）を対象に調査を行うことで、若者の心の変化を検証する。従来の社会心理学・文化心理学は、集団内の「中心的傾向」を対象とし、文化内の分散はあまり考慮に入れられなかった。それゆえに、個々の文化の中で生じる適応・不適応がどのような形で表れるのか、またそのような文化の中心にはいない人たちの心理傾向については明らかにされていない。本研究では、適応感や不適応感を導く文化内の分散・個人差を考慮に入れた実証データの提示を試みることで、より多層的な幸福感の有り様を明らかにする。さらに昨年度までのプロジェクト「青年期の社会的適応：ひきこもり・ニートの文化心理学的検討」を継承し、実際に社会で起こっているさまざまな心の問題へのアプローチを視野に入れる。

本研究は、1) 現代日本社会におけるコミュニケーション、自己価値の置き方、感情表出等を検証し、これらと幸福感の関連を調べる、2) ニートやひきこもりに関連する社会・文化的構造について、文化心理学による日米比較研究を通じて検討を行う、という2

点を検討することを目的としていた。さらに2011年3月の東日本大震災を受けて、日本における幸福感についてより包括的な視点から考察する取り組みも行った。

これらの視点を組み合わせ、社会心理学的に動機づけ、自己観、態度などを分析することにより、日本におけるひきこもりやニートについてどのようにアプローチしていくべきかを検討し、得られた知見を社会に還元していくことが可能になると考えられる。また、アメリカなど他の地域と比較検討する視点を持つことにより、日本文化の持つ構造との関わりについて具体的に考察する。

■研究内容とその成果

1) ニート・ひきこもりと動機付けについての考察を深め、連携研究員のピナイ・ノラサクンキットとの共著論文の執筆・刊行に至った。2011年12月に発表された論文（Norasakkunkit & Uchida, 2011）は多くのメディアで取り上げられた。また、2011年5月31日にひきこもりを考えるワークショップ「映画『扉のむこう』上映会～「ひきこもり」に迫る～」を開催、ローレンス・スラッシュ監督らとともに、ひきこもりの心と社会についての討論を行った。

2) ニートやひきこもりに関連する社会・文化的構造について、文化心理学による日米比較研究を通じて検討を行った。特にニート・ひきこもり傾向と表情判断の関連を調べる実験研究を行い、ニート・ひきこもりリスクが高い学生は、ある人物の表情判断においてより周辺情報にも注意が向けられていることが示された（矢野・内田・増田, 2012）

3) 幸福感について心理学のみならず経済学や社会学の関係者とのディスカッションを重ね、現在日本の幸福の指標のあり方ならびに東日本大震災が幸福感と対人関係に及ぼした影響につい

て検証し、論文での成果報告を行った（内田, 2011〈日本計画行政学会論説賞受賞〉；内田・荻原, 2012）。

4) 近年の日本社会には個人主義的な傾向が、制度上あるいは心理傾向としても取り入れられていると考えられる。こうしたことが生み出す心理的な幸福感への影響について検討する実験と調査を実施した。実験研究においては、個人の成果が問われるような競争的環境（個人達成志向的環境）もしくは他者との調和が問われる環境（関係志向的環境）のいずれかを想起させ、その環境下での人間関係のあり方や幸福度を判断してもらった。すると日本において個人達成志向的環境は対人関係の結びつきを減じ、幸福感も低下させることが示された。さらには個人達成志向が強い日本人は、より幸福感が低いという、文化内での個人差も示された（内田・荻原, 2012）。

■今後の検討課題

日本における社会構造の変遷と人の心の変化、幸福のよりどころについてより詳細に検討を行うため、実際に成果主義を導入してきたような企業におけるデータ収集を行い、心身の健康と幸福、そして個人主義的価値観との関連を調べていく方針である。